

第3分科会 進路・学力保障

子どもたちの未来を拓く進路・学力保障をどう進めているか

③分散会

★一日目★

○討議の概要

本人に責任のない課題を背負い生きている子どもたち。彼らの進路を保障するためには、同和教育を基軸とし、これまでの取組の成果と課題をふまえ、実践を積み重ねていく必要がある。当事者が差別を感じながら、しんどさを吐露できずに生きている姿を見ているのか、見ようとしているのか。また、子どもたちの暮らしを丁寧につかみ、子どもや保護者の願いや思いを受け止めているのか。討議を通して、自分がどこに立っているのかを確かめ合いたい。

子どもたちの言葉や行動の背景に何があるのかをつかみ、子どもたちの学びや育ちを阻害しているものは何かを見抜き、私たち自身の立ち位置を問い直しながら、事実と実践に基づく議論と交流を深めていくことを確認し、報告に入った。

—報告1—⑭

将来？親に面倒みてもらう～先に進むためにどう寄り添うのか
(滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 3年生のスタートが順調だったAが、修学旅行後に急に崩れてしまった背景や要因は。

報告者 2年生の頃から修学旅行を目標に頑張っていたが、自分の中での目標を達成し、ほっとしてしまっただけでは。次の目標が立てられず欠席や遅刻が増えたと思われる。

三重 自分自身の生活のしんどい部分を友人に話せていれば、友人と助け合いながら頑張れたのでは。どんな困難も乗り越える「折れない心」の支えとなる横の繋がりはなかったのか。また、困り感が発信できるよう周囲の仲間に話すようなアプローチは行ったか。

報告者 本人へは今後どうしていくのかを時間と回数をかけ、一緒に考え、整理していくことから始めた。しかし、自分の家庭のことを話せる友人はほとんどおらず、部活も辞め、同世代の子どもとの繋がりが薄くなっていった2年生の後半だった。本人に「自分のしんどさを誰かに話してみないか」という促しは行っていない。Aのことを気にかけてくれる生徒には協力を求めた。周囲の子どもたちは声をかけてはくれるが、実際どのように関わっていけばよいのか困っている様子も見られた。しかし、いつAが来ても良いようにと

準備はしてくれていたと思う。

福岡 本人が頑張ろうと思えるモデル像的なものはあったのか。また仕事をどのように捉え直していったのか。

報告者 おしゃれな人がキラキラとして見え、自分も何らかの形で関わりたいという気持ちが芽生えたのでは。身近なモデルである母に対しては、口では不満をもらしながらも感謝はしており、仕事で疲れて帰ってくる母の姿を見ながら「自分には（仕事は）無理だ」という思いを持ちながら、可能な限り母に依存していきたいと思っていたのではないかと思われる。

徳島 学校としての課題は何か。

報告者 子どもの気持ちを考えずに家庭訪問を繰り返して、学校に来れないかというプレッシャーを与えてしまっていたこと。しんどさを抱えた子どもが共に乗り越えていける横のつながりを築いていくためにどう支援していくかが今後に向けての課題と考える。

現在のAは高校に通い、アルバイトも頑張っている。興味あることに自分を表現している印象。今後、壁にぶつかったときは、逃げずに自分の思いを大切にしながら、一歩ずつ前に進んでほしい。自分の弱いところを見せながら、上手に人に甘えられるような人になってほしいと願っている。

—報告2—⑯

Aの成長～卒業式の返事に込めた思い～

(大阪府人連)

—主な質疑と意見—

福岡 ①結婚差別の学習の中身について②報告者の部落問題学習との出会いについて教えていただきたい。

滋賀 (関連して) 保護者の思いを聞きだせたのは、学校でのこれまでの取組があってこそ。そういう観点からも教えていただきたい。

報告者 1年生から教科書無償化、就職差別、結婚差別と段階を追って取り組んでいる。差別はどこか遠くの話と感じている子どもたちに地域におられる身近な方に話をしていただき、実際つらい思いをされていたことも知ることができた。部落問題学習を始めるにあたり、地域担当の先生に協力を得ながら家庭訪問をしたのが部落問題学習との出会い。「あんたらはこのときだけやけど、わたしらは命かかってんねんで」という言葉が印象的だった。

京都 学校との関わりもかつては熱心だったはずだが、現在の地域の活動はどのようになっているのか。取組の内容は今も差はないはずだが、以前と比べると薄くなった印象を持つ。なぜそんなに変わってきたのかというところを教えてほしい。また、子どもの変化が父の気持ちをどのように変え、影響したと思われるか。

報告者 父は人との関わりをすすんでもたない自分の娘を「これでうちの子おもしろいやろ」と前向きに話す。また「人との繋がりを広める取組を

頑張っ欲しい」とも話された。卒業式の後、前を見つめて大学進学を目標とするAを母は喜んでおられ、父も同じ思いでおられればと願う。**報告者**と同じ学校に勤める人権担当 地域の方の思いをしっかりと受け取めることを目的とし、お話を聞かせていただくという機会を大切にしている。全職員で共有するため夏休みには小中で合同研修を行った。市での人権学習会も多数行っている。教職員の意識を変えていかないと強く思っている。いろんな差別事象は子どもたちは目の前にあり、差別のある現実には負けない気持ちを胸に刻みながら学習に取り組ませたい。

連携していた小学校 学区には人権団体が複数ある中、支部と学校との連携もとりにくくなっている。だが、子どもたちに部落問題学習に取り組ませたいという思いを地域の方に理解していただきながらの繋がり、今後も大切にしていきたい。

熊本 小学校高学年になると子どもは自分を語らなくなる。担任が語り、それに対して子どもたちが返すことを繰り返して思いを高めていきたいが、「語る」ということは難しい。日頃子どもたちにどのような声かけをしているか、また人権学習で大事にしていることなども聞かせてほしい。

滋賀 進路を拓いていくという視点で、A本人やクラスの仲間たちにどのようなことを語ったか。

報告者 地域の方の話が、私にも子どもたちにとっても非常に印象的な内容だった。「野球をする中で審判から不当なジャッジを受けたり、試合自体に呼んでもらえないという差別を受けて怒りを覚えたが、相手をたたえることで周りの方を味方につけた」という体験などを話してくださった。この話が大変印象的で、この学習を終えた後、Aは学級に戻ったあと「一人で立ち向かっていかれへんかも知れへんし、周りとの力を合わせて変えていかないと」と繰り返し話していたのが印象的だった。

総括討論【1日目】

福岡 指導案がうまく継承されていかない。結婚差別の学習についてはものすごく思い入れがある。地域の子どもたちが授業の中で初めて結婚差別について知ることが、本当に良いのだろうか。できれば地域で出会わせてあげたい。またそのとき地域は、学校は、何をもって子どもたちに向き合い語れるのか、という思いがある。授業に入る前に地域の大人が子どもたちにしっかり話しておくことで、子どもたちも顔を上げて授業に向き合えるのではないかと。また、クラスの友だちや好きな人が真剣に授業を受ける姿を見て「これだったら差別がなくなるのでは」という展望を見出し、安心するのではないかと。学校は「周りの人たちが変わっていくべきだ」と子どもが思えるような授業を積み上げることが大切であると思う。

滋賀 「差別があるから本当のことを言おう」というのも「差別があるから言わないでほしい」というのも、どちらも差別があるからだと思う。関

係のある子どもはいる。部落差別はまだ実際あるのだということを忘れず、今後も学びを深めていきたい。

徳島 かつては地域の運動団体の方と一緒に同和教育をすすめていた時期もあったが、法切れの中で薄まってきているという印象を受ける。教員に対しても問題意識の低さを感じることもある。本日（大阪の）報告の中でAの父のことば「うちの子、これでおもろいやろ？」からは、差別を受けながらも戦ってきた父の子どもに対する接し方という点で、大いに学ぶことがある。また報告の中で「学校に来ることができない、教室に入れないというのは問題だ」という印象を少し受けた。そういうところが私たち学校の課題にならぬのでは。そういうところにも気づかせてもらえるのが、地域との関わりだと考える。自らの捉え方についても反省したい。

滋賀 もやもやしたものが残る。「むらをかかえる」「当事者」「差別との出会い」など、他人ごとのようになってはいないか。差別に対して怒りを感じ、それを責めているときは楽だが、自分が差別者だと気づいたときが非常に苦しい。「差別を自分事として捉える」とか「自分の中の差別心」というが、どれだけの人がそのことに気づいているか。「自分はどうか」ということを常に考えるべきである。

同和教育の薄まりに対する地域の方の思いも様々で、地域との連携は今非常に難しくなっている。とはいえ、地域の方と関わることは、私たちの学びの中で大変大切なこと。結婚差別をはじめとする部落問題学習が継承されていないという現実はあるが、だからこそ、これから部落問題学習の大切さをもう一度理解し、私たち自身がどうとらえ、実践していくかが問われているのではないかと。

自分自身の差別心に気づいているか、自分が差別者ではないかという認識を、私たち自身が持たなければならない。

★2日目★

—報告—①

国境を越えた友好が生んだ未来～カンボジアー日本友好学園支援プロジェクトを通して～

(徳島県人教)

—主な質疑と意見—

香川 子どもたちがカンボジアの子どもたちとの共同作業で一つのものを作り上げていく。大人はつついいろいろなことを危惧してしまうが、それを乗り越えていく子どもたちはすごいと感じた。日頃の人権教育の概要を教えたい。また、活動を通して、子どもたちの進路に対する意識にどのような影響があったのか教えていただきたい。

報告者 特色ある取組としては、年間指導計画のもと学年を縦割りにしての公開授業を行っている。他学年の学級活動を子どもたちと一緒に参観

し、その後、教職員での研修を行っている。子どもたちから意見を聞き、同和教育やSNS問題など学級の実情に合わせ、深めたい内容について担任が指導案を考える。全校では人権部という部活動が主体となり、部落差別解消法や障害者差別解消法などについて事前の調査や研究を行った後、全校集会等での発表を行っている。学級の人権委員の協力を得ながら、自分の意見を伝え、共有することを大切にする取組を展開している。自分が良ければそれでいいという子どももいるが、「同じ」という目線を常に持ってほしいということを常に伝えている。海外と関わる進学・仕事に興味にあるという子どもは27年度40パーセント程度であったものが、29年度は65パーセントまで上昇した。海外の大学に進学したい、また国内の大学からの留学や、将来地元において海外と関わる仕事をしたいという生徒もいる。

カンボジア日本友好学園の生徒も卒業後に日本と関わりたい、日本の企業に就職したいという生徒が大幅に増えた。プロジェクト立ち上げ時の子どもも大学で日本語を学び、現在はこのプロジェクトを支えてくれる貴重な存在となっている。

滋賀 ①海外支援プロジェクトの話子どもたちにしたのは誰か②外国に関係する子どもたちの反応は③渡航費用などはどこから出るのか。

報告者 ①子どもたちに伝えたのは教員。実際自分で行き、現地の様子を子どもたちに伝える中で「こんな状況に国があるよ、どうする？どうしたい？」と子どもたちに問いかけた。当時は東日本大震災の支援活動がピークだったこともあり、忙しい最中ではあるが、それでもやりたいかと子どもたちに尋ねた。

②現在、外国籍の生徒はいない。現在受け入れに向けて交換留学などのカリキュラムを考えたり、研究などを行っている。

③費用については、様々な事業指定を受けながら。子どもたちの渡航費用についても事業費で負担している。

島根 取組を進めていく上で、いろんな事情や背景、思いから活動に乗ってこれない子どもたちもいるのでは。みんなと一緒に取り組めない子どもの思いを丁寧に拾い上げ、周りと繋ぎ、子どもの変容を見て取ることも大事と考える。私たちが見ていけないといけないうのはそういった子どもたち。そういった子どもへの支援や仕掛けはあったのか。

報告者 ビジネス研究部の子どもたちのカンボジアに対する思いの差は確かにある。活動に乗りきれない子どもたちもいる。子どもたちには毎月どのような活動をしたいかを尋ね、自分たちの意思で選ぶことができるようにし、面談を丁寧に、行い気持ちのケアをしている。別のやりたいことを見つけてくる生徒の相談を受け、その活動を支援する関係が育ってきていると思われる。

学級ではカンボジアからやって来た子どもに

高校生の方から寄っていくという光景も見られる。差別がないフラットな状況につながっていくのではと期待している。

徳島 学業成績で課題のある場合はどのようにしているか。

報告者 部活動に集中するがゆえに、学習面でよろそかになってしまう生徒もいる。朝や夜間の補習などを行うなど、学習支援を行っている。海外支援プロジェクトの裏にはこのような学力保障の取組がある。一方、カンボジアではこのプロジェクトに参加したい子どもたちが多数おり、成績などを含めて、選抜が行われているという現実もある。

福岡 これまでの人権・同和教育が生きている発表だった。子どもが命を落とさないようにこれからも学校は頑張してほしい。くさいものは蓋をするのではなく、差別はあったという事実をきちんと教えてほしい。しっかり教えられた子は必ず立ち上がれる。

同和教育は生きている。私も差別を受けた。今は相手を恨む気持ちはない。これからも相手を変える運動を続けていきたい。全世界の子どもたちが命を落とすことのないよう、これからも会場で訴えていきたい。

—報告—⑩

Aが安心できる居場所づくり (京都府人教)

—主な質疑と意見—

徳島 Aが教室に入りにくくなったきっかけや理由、そのときのAの思いは。また、Aが成長できた原動力とは

報告者 クラスの隣の席の児童からの一言に傷つき、教室に入りにくくなったと思われる。もともとは北海道で生活していた。A自身、こんな風になりたいという夢をしっかりと持っている子。なりたいた自分に向かっていくために友だちの支えや「ありがとう。すごいね」という声かけが、次へのパワーとなったと思われる。

滋賀 Aはすごく言葉が豊かな印象。その裏には様々な関わりがあったと思われるが、意識していた言葉がけや、本人が成長していく中でそういえばこんなこと話していたなということがあれば教えてほしい。また、Aについて学校が組織として大事に伝えてきたことは何か。

報告者 Aに限らずどの子にも「ありがとう」と声かけするようにしている。素敵なことをしている人についてはみんなで共有。学級一人ひとりに対してそんな声かけをしていた。家庭が不安定な状況でA自身が抱えているものも大きかった。本人の悩みは、後から「あのときはどうやった？」と本人の気持ちを聞くようにしていた。

教室を飛び出したあとは、階段の隅のほうに隠れたりしていたA。やがて非常階段に一人で行ってしまったりするようになると、安全確保がしっかりできるように教員同士で声をかけ合ってい

た。どの先生も普段からA自身の良いところをほめていた。学校全体であなたを見ているよ、ということ職員みんなで協力し、本人に伝えていた。**滋賀** ①当初から多くの子が包み込むような優しさが学級にはあふれていたが、そうでなかった子はいなかったのか。優しくできるようになる変化があったのか。②なかなか向き合えない学習に対する支援はどのように行ったのか。別の教室で過ごす本人に対する支援や関わりについて教えてほしい。

報告者 ①「なぜあの子だけ」と言う子どもはいなかった。そう思っていた子どももいたのかも知れないが、Aに対して、ということに限らず、苦手なところはお互い助け合いながら、という学級の雰囲気できていた ②もっと十分な学力をつけるための手立てを取れなかったのかと後悔している。自分の席に座って学習することができないため、本人用の教材を準備し放課後一緒に取り組んだり、今できることに少しでも取り組めるような働きかけは行っていた。支援学級では和太鼓クラブの活動に参加していたこともあり、支援学級での活動に参加して、そのときに感じたことを作文に書いて発表したり、得意なことを絵で描いたものを飾ってもらうなどして本人を支えた。**滋賀** 北海道へ転校したあと、また学校に行けなくなったが、中学校でもまた登校できなくなるという心配もでてくる。いろいろな子どもの情報をやり取りする小学校と中学校との連絡会はあるとは思いますが、匂いのある連携というか、組織的なことも含めてそういうことはあるのかどうか。顔が分かる状態での繋ぎは、中一ギャップという課題もあるのでありがたい。

報告者 今は学年全員に理解してもらっていると本人も思っている。しかし、中学校に上がり環境が大きく変わる中で、本人が対応していけるのかどうか大変心配。お互いが支えあえる風土をこれからも大切に、中学校でも頑張ってもらいたい。学期に一回ずつ中学校教員に授業を参観してもらい、子どもの情報を細かく交換する機会を設けている。

滋賀 会議での連携だけでなく、立ち話で情報交換できるような連携も今後必要なのでは。会議の場でない情報交換が肝心だという場合もある。

三重 Aは自身の家庭環境についてどのように感じていたのだろう。担任に伝えることはあったのか。また日記の中で友達の良いところを綴り、という場面があったが、どのようにクラスの子どもたちに返したのか。このような取組は日常的になっているのか。本人が家で生活について書くようなことはあったのか。

報告者 自身が家庭のことをどのように考えているかについては直接本人と話すことはなかったが、印象的だったのは、転校することになったとき「あなたはここでみんなと卒業したいんじゃないの?」と尋ねると「でも、やっぱりお母さんだ

から」と話したこと。母との関係も大事と捉えていたと思われる。

作文は子どもたちが楽しんで取り組めるよう、たくさんあるテーマの中から自身が選べるような形式をとった。学級の中で紹介したり、教室の後ろに掲示して誰もが読めるような工夫をした。Aは家で宿題をするのも難しい状況。しかし、物語を書いたりすることが好きで、自分がこんな物があったらいいなというものを綴っていた。家の中のことを書くことはなかった。

—報告—⑩

「(家族以外に) はじめて相談できる人ができた」に出会わせてくれた子どもたちのこと

(熊本県人教)

—主な質疑と意見—

徳島 自分が通う特別支援学校の制服を恥ずかしいと思ったり、自分が特別支援学校の生徒であることを受け入れられない、みんなに知られたくないという生徒の話はものすごく気になった。特別支援学校の問題というよりは周囲の問題であると考え。特別支援学校と地元の高等学校等との交流会は、同じ年代の子どもたちが交流する機会だが、具体的にはどのような取組をしているのか。**報告者** 隣の農業高校と毎年弁論大会を行い、弁論交流を行っている。国語の授業を通して生活体験文を綴らせているが、思いを伝えていく場として弁論大会が象徴的であると考え。

福岡 わざわざ一つ前の停留所で降りて学校に向かうという光景が、被差別部落の子どもと重なる。報告者がご自分の家庭のことを語り、同和教育が生きているということを示してくださった。これこそ人権・同和教育と思う。

報告者 (初任の) 高校に赴任したとき、地域の子どもが一つ前のバス停で降りていたのを思い出した。今回自分のことを話したが、このことで私は弟を取り戻せたと思った。

三重 報告での最初のことばと最後のことばが印象的。差別の現実立ち、今後考えるべきことを示している。子どもたちは支援学校を卒業後、社会に戻っていく。解消していくべき課題というものがある。中学校の支援学級在籍、通常学級在籍それぞれの子どもたちが入学を希望していると思われるが、入学選考の基準を教えていただきたい。選考からもれてしまった子どもたちの進路についても教えていただきたい。

報告者 学力検査、作業能力検査、運動検査、そして面接がありすべて点数化される。毎年1.2倍くらいの倍率。選考からもれてしまった場合は、周辺の支援学校への進学や、地域の高校に行く子どももいる。高等支援学校での3年間は学習会だと思っており、子どもたちを鍛えようと思っている。

島根 かつて担任した学校での子どもとのやり取りを思い出した。親に置かれたその子の親への捨てきれない思いに、一緒になって向き合うことが

できなかったことが心残り。報告者は子どものことや自分のことに正面から向き合い、正直に生きておられる。大事なのは教師の姿勢、生き様。だから、Aにもいろいろ伝わったのではないかと。**報告者** 今回の報告はAが180度変わったというわけではないが、自分は捨てられたんじゃないかと本人が思うことができた、うちの学校では宝である実践。

熊本 報告者と一緒の学校で担任をしている。出会った初日に担任する子どもから「私のことあんまり知らないくせに。私の何が分かるんですか。私は面倒くさいですよ」と突きつけられた。どのように向き合えば良いのか悩んだが、何か気づいてほしんだらうなと思い、現在も根気強く話を聞いている。これからも本人の気持ちが揺れることもあるかも知れないが、子どもの進路保障のために頑張っていきたい。

まとめ

【自分を語る】

自分のことを語らなければ、部落問題学習はできないのだろうか。若い教員について部落問題について語れないことについて厳しくはなっていないだろうか。あえて語らずに部落差別について子どもたちと学習する方法はないのだろうか。▽部落差別についてなかなか議論されないが、差別はある。どこにでも関係のある人がいるんだということ忘れてはいけない。どこにでも関係のない人はいないということもみんなが知っておかないといけない。だから自分も話していきたいし、考えていきたい。▽自分のことを語るとは相手に向けて話すということではなく、自分がどう生きてきたか、またこれからどう生きていきたいのかを自分で言葉で表し自分に確認し、突きつけることではないか。▽子どもの語る姿を見ながら、人を決め付けたり見下している部分が自分の中にあることに気づいた。そんな自分の中の差別する心に悩んだ時期もあった。子どもの抱える課題は上っ面で迫るのではなく、背景を考えて迫らないといけないのでは。語るということは自分自身を見つめなおす大事な作業だと思う。▽相手との関係性や、受け入れてもらえている喜び・安心感というのも大きい。同時に、相手の気持ちを感じ取るための「聞く」「受けとめる」というトレーニングも大事。▽熱い思いを持って語ったとしても、話し方等によって伝わらなかったり、間違っただけで伝わることもある。伝え方が大事なのでは。聞く雰囲気をつくり出すため、日頃からの学級経営や個々の関わりは欠かせない▽自分が部落問題に対してどのように向き合っているかを子どもたちに伝えていけば良いと思う。子どもたちが自分自身の属性を自覚していく作業をしていくときは、匂いを嗅ぎとってくれるように。▽「なぜ先生はむらの学習会に来たのか」と尋ねられたことがあった。ずっとその返しにこだわっていた。どう返せばいいのか。それには自分のことを振り返

らないといけない。差別に対する憎しみは、差別の構造の中に組み込まれたものでもある。あの時の子どもの問いに対する答えを探すためにこれからも学びを続けていきたい。▽語りたくなるから語る。語りたくなるような、出会いや取組を作っていくことが教員に問われており、自分の生き方を問われているのかなと思う。

【しんどさを抱える子どもたちのこと】

「あなたがどのような状況であっても私は逃げないよ」と子どもたちに示す姿勢のあり方が子どもたちに伝わり、何らかの変容を見せているのではないかと。▽どのレポートにも変えなかった視点があったと思う。目の前にいる子が、今何に困っているのかに目を向けることが大切。▽子どもと関わってはいいても、子どもの「生き方」に関わろうとできているのだろうか。困難に立ち向かい「逃げない」という価値や大切さを子どもに伝え、感じる事ができれば、子どもが自らすすんで他者との関わりの中に入っていこうとできるのでは。

【部落問題学習に関わって】

法切れという言葉のもと部落問題についてなかなか語れない状況の中、私たちはどれだけ部落問題に迫っていけるのか。不安もあるが地域からの強い要望もある。自分に引き継げることは何かと問いながら、学びは今後も続けていきたい。

レポートの実践にもあったように、肯定的な物の見方を子どもに与えていかないといけない。差別は許さないと子どもに対して語れる教員が増えてほしい。そのためにも自分の中にある差別心について気づくべきである。

【若い方への継承・仲間について】

▽いろんな環境を背負い学校に来る子どもたちも、いつも同じ温度で話を聞いてくれる先生がいるから救われる。最後まで子どものことを信じぬくのが教員の仕事。そんな風に思える教員の仲間を広げていきたいし、子どもたちにも仲間づくりの素晴らしさを伝えたい。▽それぞれの学校や地域での課題を解決するにあたり、繋がることのできる環境づくりが大切。どうしても遠慮してしまい若い先生方への助言ができにくくなっている現状はあるが、先輩教員も今一度しっかり考え直すべきなのではないか。

報告者からは「仲間と一緒に来れて学べたことが貴重な場だった。現場に戻り、揺れやつぶやきが子どもたちから出てくると思うが真摯に取り組んでいきたい」「この大会でよい出会いをさせていただいた。変わらないことの大切さを認識し、また新たにいただいた視点でこれから変わっていこうと思えた」「子どもがいろんな人と直接出会うことを通して成長していく過程を見つめ直せた」「このような場がなければ、過去の取組を振り返ることはできなかった。あのときの子どもの思い、自分の考えなどいろんな気づきがあった」「今気にしているAさんに返していきたい」「5

本のレポートでいろんなつながり方があって、そのつながりが子どもの変容を生んでいるという共通点も見えた」「子どもが困っているときに放置せず、向き合う姿勢が大事。子どもを見守る力をさらに高めていきたい」という感想を話され、会場全体で共有した。

参加者それぞれが二日間の学びを地元を持ち帰って伝えることを確認し、来年度もこの会で出会えることを祈念し、あたたかい雰囲気の中で閉会した。